

りんごの音符

16



青い海と森の音楽祭



ホルンカルテットの演奏会に出演した鈴木さん
＝10月30日、東京・新大久保のスペースD。

私が音楽を始めたきっかけはピアノでした。最初は遊びでやってたようなもので、あまり得意にもなれませんでした。音楽にのめり込むようになったのは中学校でホルンを始めてからです。実は小学校6年間は柔道に打ち込んでいました。父が先生だったのでやられていて(笑)。相当スバルだったので精神力は鍛えられました。並大抵のことはめげずに取り組めるようになりました。高校でも吹奏楽を続け、顧問の先生から芸大受験を勧められたことでプロを意識するようになった。レッスンを受けていた高橋臣宜先生(東京フィル首席奏者)がプロオーケストラを生で聴かせてくれて、ホルンの音がカッコよくて衝撃を受けました。高校1年か2年のときで芸大では、仕事として演奏してお金をもらうという経験をして責任感が芽生えたのを覚えています。オーケストラに乗せてもらう機会ももらい、プロへの憧れはより強くなりました。現在所属している東京都交響楽団は伝統のある楽団で、音楽の方向性がしっかり定まっているのが特

です。どの曲を聴いても基本的にホルンがいるという感じです。多彩な音を変幻自在に出せる点が魅力ではあります。奏者としては大変な部分でもあります。音域がかなり広いので高音と低音の奏者に分かれて演奏します。バイオリンからコントラバスまでをホルンでカバーできるようなイメージです。

ホルン 鈴木 優さん (群馬県出身)

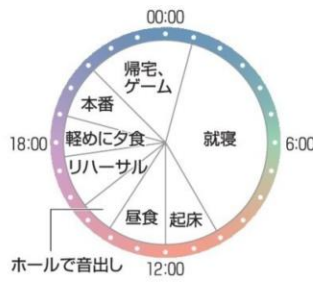
変幻自在の音で彩りを

微々です。冷静さと情熱がバランスよく、若手のフレッシュさを感じられます。オーケストラごとにカラーがあるのも面白いですね。ホルンという楽器はとても歴史が長く、たくさんの編成に使われて

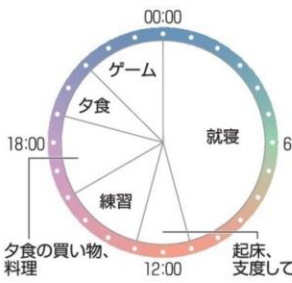
夏に出演した「青い海と森の音楽祭」では、青森に初めて長く滞在しました。自然豊かで空気も澄んでいて、お客さんが温かかったのが印象的。とても待ち望んでくれたのが伝わりました。その空気感で演奏

を身につけ、音楽に対する誠実さと愛を失わないように向き合っていきたいです。(まとめ・秋村有香) ※次回は12月9日に掲載します。

夜の演奏会の日



オフの日



〈すずき・ゆう〉群馬県出身。東京芸術大学卒業。2014年ヤマハ新人演奏会に出演。Menagerie Brass Quintetとして第10回チェジュ国際金管楽器コンクール金賞五

重奏部門第1位を受賞。ホルンを高橋臣宜、守山光三、日高剛、西條貴人、伴野涼介、五十畑勉の各氏に師事。東京交響楽団を経て19年から東京都交響楽団団員。

鈴木優さん

楽器を知ろう

ホルン

名称に「ホルン」という単語がつく楽器はたくさんありますが、一般的に「ホルン」というと金管楽器の「フレンチ・ホルン」を指します。(以下、ホルン)
ホルンは、渦を巻くように複雑に巻かれた管と、楽器本体に対して比較的

大きなベルが特徴的な金管楽器です。しかも、ベルの向きは多くの金管楽器が前や上を向いているのに対し、ホルンは右後方を向いていて、その点でも特徴的な楽器です。
ホルンの起源は、狩猟で獲った獣の

角を加工して楽器にしたという説が有力です。その後、狩猟時の信号用の楽器を経て、音楽で使用する楽器に発達しました。最初は全ての音程を自在に出せる機構がなく、自然倍音とベルに右手を入れて音程を変えることで演奏する「ナチュラル・ホルン」が用いられていましたが、その後改良が重ねられて、現在では「フレンチ・ホルン」が標準的に用いられています。

低音から高音まで出せる音域が広いことと、優しくまろやかな音色から強く激しい音色までカバーできることから、クラシック音楽だけでなく、映画音楽やゲーム音楽にもよく登場します。作曲家のリチャード・シュトラウスは「ホルンほど人間の感情を幅広く表現できる楽器はない」と述べ、その魅力を称えました。
一方で、ホルンは「世界で最も演奏

が難しい金管楽器」としてギネスブックに記録されています。音の高さの調整が難しく、息の入れ方や口の形が少し変わるだけで、出そうとした音とは違う音が出てしまうことがあります。そのため、演奏者には集中力と技術が求められます。
外見も音色も個性的なホルン。ぜひその音色を聴いてみてくださいね。
(県吹奏楽連盟監修)

2026年11月1～8日に第2回「青い海と森の音楽祭」が開かれます